

中 島 嶺 雄 著

『現代中国論』

青木書店、1965年、288ページ。

I

1956年のスターリン批判は、周知のように国際共産主義にきわめて深刻な転換をもたらした。過去10年間の共産主義陣営の歴史は、いわば、この「批判」がもたらした陣営内部の多元化的諸潮流の葛藤の歴史であったともいいうるであろう。

このような衝撃は必然的に「研究」の次元にも波及せざるをえなかった。そして、多くのソ連研究者の中には過去のスターリン支配の呪縛から解放され、社会主義革命の新しい理論と分析視角を求めて再出発が始まっている。だが、日本の中国研究に関していえば、このスターリン批判の衝撃は研究方法への反省という形ではいまだ結実していないようである。多くのマルクス主義的中国研究者は依然として「スターリン批判以前」の状態にとどまっている。かれらをつつむムードは、特殊日本の無風状態であり、知的不感症である。その多くは中共のリーダーシップの方向に自己を密着させ、現代のマルクス主義全体の試練を回避している。あるものは中ソの口汚いののしり合いに当惑し、故意の沈黙を守るか、はなはだしいのは今日においてすら「中ソ論争」の存在を否定しているものもあるのである。中島嶺雄氏の『現代中国論』はこのような日本の硬直化したマルクス主義的中国研究の状況の中で、それを打破するものとしてきわめてユニークな注目すべき内容をもった労作として出現したのである。

II

本書がスターリン批判と中ソ論争の進展の中で学生時代を送った若い世代の研究者によって書かれたものであるということも、今後の日本におけるマルクス主義的中国研究の新しい方向を暗示するようで興味深いものがある。著者の中国研究に対する態度の一端はつぎの言葉の中に十分に示されているだろう。すなわち、「これまでのわが国の中国研究とくに社会科学の分野での研究には重大な欠落部分があるのではないかと思う。その出発点

にあったであろう贖罪の意識は、いまやいつのまにか対象への拝跪と正当化主義に置き換えられてしまっている。そして、このような先有的傾向のもとでは、批判的合理性の追求こそ、創造的革新への貢献になるのだという精神がつねに看過され、思考の停止状態のなかで、一方では“擬似”主体性を唱え、他方では中国共産党の公式文献の解説的伝達者になるという結果に陥っている」と。現在の日本で支配的な傾向となっている、イデオロギー以前の問題としての中国に対する研究者の情動的・精神主義的偏向を拒否して、社会科学的分析の回復を強調する著者の主張には、スターリン批判以後の新世代のマルクス主義者の特徴が鮮明に表現されているというべきであろう。

著者の現代中国論を貫く基本的態度は、2点に集約される。一つは、すでにのべた中国革命の評価における特殊日本人的な中国に対する「負」の意識からの断絶である。他の一つは、スターリン批判以後のソ連共産党の指導理論に依拠しながら、中共の特殊性と現体制の偏向を批判的に分析してゆくということである。著者にとっては、中国はまずマルクス主義の理論的関心という視点から「対象化」されている。したがって、ここでは、マルクス主義自体の問題として中国の偏向が徹底的に追求されるのである。著者はいう。中国における「政治的成功という事実」と「思想の現実」、「思想の創造」とは別のことである。その安易な同一化は「思想の死」である。著者にとっては、中国革命の偉大さは「それがマルクス主義の名において勝利したという事実」から評価すべきであるとされる。また、それであるからこそ「中国の現実をつねにきびしく直視」していかねばならないのである。

こうして、著者は中国革命を現代の中国の政治的・イデオロギー的状况と革命の歴史的品格との「二重の振幅」でとらえ、そこにきわめて重大かつ深刻な問題が提起されているのを発見するのである。ここで著者は単に中国革命の勝利がもたらした「巨大な重量に圧倒されているだけでは済まされない」とのべている。ここから著者の「新しいマルクス主義」の立場からする中共=毛沢東路線への批判的分析が始まるのである。本書における著者の論点は二つに大別される。それは、毛沢東思想の特殊性を追求すること、1956年から始まる中国の大転換の政治的構造とそのイデオロギー的状况を分析することである。そして、この二つの問題は、「スターリン批判」と「中ソ論争」というマルクス主義にとっての深刻な課題と真

正面から対決するという問題意識を結節点として統一的に把握されているのである。中島氏の分析は、中ソ論争を媒介として「毛沢東思想」への神秘主義からは解放されているために、きわめてリアルな柔軟性に富んだ思考に満ちているといえることができる。

III

では、著者の「毛沢東思想」観とはどんなものであろうか。著者はまず、毛沢東の思想的形成のプロセスを伝記的にたどって、その特質として3点をあげている。第1点は、毛沢東の思想的転換の状況である。政治的実践の緊迫性という中国の現実の中では、マルクス主義は、体系化して毛沢東に摂取されず、単に「信念的に保持すべき行動の指針として、また、戦略・戦術的テーゼとして受容され」、しかも、この場合かれの先有的なマルクス主義以外の諸傾向によってその理論は、「容易に変容されうという条件」をもっていた。ここに毛沢東思想の一面性、限界性、独自性の基盤がある。第2点は、土地革命へのビジョンである。毛沢東の農民を主体とする労農同盟の理論は「レーニンの労農独裁の理論を素通りした独自の地点において形成」された。つまり、毛沢東のそれはプロレタリアート主体的であったレーニンに比べて、あくまでも農民主体的である。このような毛沢東の労農同盟の理論は、「レーニン理論の継承によってではなく、ひたすら農民運動の経験のなかで生みだされた」ものである。第3点は、毛沢東の軍事思想の形成において中国古代の英雄・伝奇小説が大きな役割をもっている。この点で毛沢東は、クラウゼヴィッツの「戦争論」の系譜というよりは、むしろ孫子の「兵法」の次元にいる。

このような思想的形成期における特質を背負った毛沢東思想は、その後の革命運動の実践過程の中で定着され固定化される。だが、「マルクスの見解と学説との体系である」とされる「マルクス主義」と毛沢東思想の間には、「完全な断絶」がある。毛沢東思想におけるマルクス主義からの「致命的な欠落部分」は、著者によれば、人間疎外の理論の不在に示される「人間学」的志向の完全な欠如と、経済学的志向の欠如である。だが、毛沢東はレーニンからもその理論を全体的理論的文脈において継承しているわけではない。レーニンからは、「主として、純粹暴力的な革命理論を継承したにすぎなかった」。毛沢東はおそらくスターリンから最も多くを継承していると著者は考える。この点については、著者は、毛沢東は認識論、世界観、国際共産主義運動の全般的諸問題等

についてはスターリンの理論と思考様式からの影響をうけており、とくにスターリンの論文「レーニン主義の基礎」は強い印象をもって毛沢東に受け容れられていると述べている。そして、ここにおいて毛沢東思想は、「経験主義的に形成された自己の革命観に、スターリン理論を接ぎ木することによって自己完結する」のである。著者によれば、ここにすでに、「スターリン批判」に対する中共の抵抗の理論的根源が存在する。

こうして、著者は毛沢東を「経験主義的革命家、実践家」であり、「いかなる意味においても、毛沢東思想こそ完成されたマルクス主義である」という評価は当たらないと断定する。そして、むしろ、「毛沢東思想の確立と絶対化の過程は、そのまま非マルクス主義的要素の再生産過程であった」とさえる。

このような「毛沢東思想」に対する中国における個人崇拜と絶対化の傾向は、1958年以後、ふたたび表面化してくる。中国における毛沢東個人崇拜の特質は、「個人崇拜の創出が毛沢東個人によってではなく、毛沢東をとりまく周囲の指導者によって積極的に推進されている」ことにある。このような状況は、中国における権力の道徳化という伝統と結合して、毛沢東思想を国の政治的・イデオロギー的価値尺度——唯一絶対の真理とすることに成功している。したがって、毛沢東思想は、国内政治の集権化にきわめて有効な機能をはたしており、また、中共の党組織原則を恣意的に家父長制化している。「今日の中国では、マルクス主義の思想的躍動が停止したかわりに、体制化した公認イデオロギーとしての毛沢東思想が全面的に機能している」。

体制化したイデオロギーとしての毛沢東思想は、さらに、特殊中国的な思考と行動の様式を導入することによって、マルクス主義の原初的構造から逸脱してゆくのである。それらの要素とは著者によれば、第1に、二元論的思考、数字による表現の図式化である。このような発想は、「マルクス主義の弁証法とは本質的に異なる機械論」であり、主観的政治主義、教条主義、オポチュニズムの基盤である。第2に、公認イデオロギーが一種の宗教的熱狂を伴って大衆へ浸透していくのを、「道徳主義」と「大衆路線」の結合が可能にしている。第3に、民族主義という強烈な非合理性の鼓舞によるイデオロギーの絶対化と、その結果としての国際主義の欠如である。

では、このような性格をもった中共のリーダーシップは「スターリン批判」をどのように受けとめ、それがもたらした諸結果に対してどう対応したのであろうか。ス

ターリン批判に対する中国的対応の特徴は、著者によれば、(1)問題を基本的にすべて個人崇拜の問題に還元して、非スターリン化という歴史的過程の構造を総体においてとはとらえていない。(2)問題をスターリン個人の「功罪」という二元論的評価においてとらえ、誤謬についても「習慣の力」に解消している。したがって、「人民内部の矛盾」という観点を提出しながらも、矛盾を生みだす社会的・制度的根源の究明を拒否するという自己憧憬に陥っている。(3)問題に対する道徳主義的評価である。中共は「大衆路線」によってスターリン的弊害の克服を主張しているが、このような立場は、社会的矛盾の内面とその発生原因についての探究ではなく、発生した矛盾の解決方法を、第一義的に重視しようとする志向とともに、独自の発想ではあるが、問題を過去の誤謬に対する道徳主義的反省にすりかえてしまう危険性を残している。したがって、中国的対応は、スターリン主義との本質的対決を完全に回避してしまい、ここに一種の「素通り」が行なわれたのである。こうした中国の対応は1956年からの国の内外における緊張の発展と、中ソ論争の発展という状況の中で、中共のイデオロギー的硬直をまねき、「スターリンへの回帰」が行なわれ、「新しい世界認識」と「マルクス主義の革新」についての中共の著しい立ち遅れを生むことになったのである。

このような中共のイデオロギー的状況の硬直化と絶対化のプロセスは、第4章、第5章の政治過程の分析の中で詳しく論じられている。著者はここでは、「スターリン批判」の国際的衝撃がどのように中国の政治体制へ投影され、それへの対応として国内政治が激動の過程に突入していくありさまを、「放鳴」運動、反右派闘争、大躍進、およびその破綻という段階を追って克明に分析している。著者の分析的概観は、この段階における政治動態を人民の改革への欲求とそれに対する権力的抑圧の論理との関連においてとらえ、また、中共指導部の諸見解とその対立と政策的転換の推移を国の内外の諸関係との関連でとらえており、現代中国の大転換期の政治構造が適確に理解できるように描かれている。

さて、著者は最後に「中ソ論争」を通じて中共の理論的特異性に接近する。中共は現在、自己の経験の国際化と絶対化を要求しているけれども、かれら自身の理論はきわめて特異なものであることをつぎの3点において指摘する。(1)ソ連社会批判の基準が非現実的であり、革命的熱狂と主観主義という自己の経験と願望の絶対化との対置にすぎないこと、(2)中伊論争、(3)「自力更生論」の特

異性についてである。かくして、このような毛沢東思想の今日的な有効性とは何かを著者は問うのである。まず第1点は、戦争と平和の理論についてである。中共の理論は、元来、毛沢東の(1)戦争と平和の相互転化論に基づく戦争不可避論、(2)正義・不正義の戦争観、(3)反「唯武器論」の3側面から成立しているが、それが現段階においては、熱核兵器、現代戦の科学的・技術的性格に対する認識の欠如と政治的主観主義、人間資本的発想の中にある人間無視のニヒリズムと民族意識の偏狭的側面とに結合されている。また、それは限定戦争の危険性の積極的過小評価などによって構成されており、「中国の指導者が企図する衝動は、客観的には世界平和に対する重大な挑戦ともなりかねない」と著者はのべる。第2点は、中共の「中間地帯」理論である。中共の理論は現代世界の四つの基本的矛盾の中から、実質的には「民族矛盾」だけを矛盾の量的側面から抽出するという誤謬を犯している。また、このような観点は、1946年頃の世界政治の構造認識に基づいたものであり、戦略的には、都市包囲の根拠地革命方式とスターリン的「連鎖の弱い環=矛盾の結節点」という思考様式の系譜に立っている。そして、このような「包囲」の論理は現代ではもはや有効ではないのである。第3点は、毛沢東の革命認識の問題であるが、この点では著者は(1)後進国革命、(2)暴動革命観と平和革命の問題を提出し、「中国的典型」がそのまま有効であるとはいえないとしている。要するに、現代の新しい個別の状況との対応関係において、毛沢東的な武装闘争優先の構想が絶えずはらんでいる極左冒険主義的傾向を排除しなければならないと主張するのである。

IV

以上が、本書における著者の見解の概略であるが、全般を通じて、中ソ論争というグローバルで巨大な論争点を背負いながら、中国の理論と対決しようとする著者の積極的な姿勢が随所にうかがわれるのである。このことは著者が中ソ論争の核心的問題を、「現代マルクス主義が現代の諸状況に対していかに対処すべきか」というマルクス主義者にとっての主体的問題としてとらえ、そこから、中国的偏向に対しては、「これを徹底的に清算しようとする理論的・思想的反撃がいかなる政治的決着にもまして必要になっている」とのべていることの必然的結果である。したがって、本書の内容もきわめてポレミックなものであることは避けられないのである。

本書の内容は包括的であり、歴史的分析、文献的考証

から、現代の政治過程、国際関係の分野をも含み、かつまた、中ソ論争を基軸としたイデオロギー論も展開されている。したがって、そこには多彩な洞察に満ちた分析がくり広げられる反面、検証の不十分な大胆性急な論断もまたみられ、これらに対しては中ソ論争の激しさに比例する激しい反論も起こりうるであろう。とくに政治過程の分析の際に現われた著者の農業基礎論、自力更生論に対する理解には異論の発生する余地があると思われる。筆者は著者が行なった「毛沢東思想」の特質の抽出と「政治的過程」の分析に対しては多くの点で同意しうるのであるが、ここで若干の疑問をのべておくこととしよう。

まず、方法論的な問題からのべてみたい。(1)著者は中ソ論争を20回党大会以後のソ連の立場に立ってとらえているが、本書においてはそれがあたかも自明の理とされているのみで、ソ連の立場の正当性についての積極的説明はなされていない。このような立場からは、中共の特殊性をソ連との対比において説明することはできるかもしれないが、それに対する価値判断は必ずしも客観的であるとはいえないのではなからうか。皮肉な表現で恐縮であるが、著者がフルシチョフ路線への「拝跪と正当化主義」に陥り、「擬似主体性」を唱えて、その「解説的伝達者」になっていなければ幸いである。(2)著者のソ連の体制に対する評価と関連してであるが、著者は Kommunismus 一般の否定的な属性を、たとえば「個人の解放を集団や国家への献身と忠誠とに置きかえる」というような現象を、「中国文明」との重複関係においてとらえるのみで、Kommunismus 一般の政治の論理の追求の中で問題とはされていない。著者は毛沢東思想におけるマルクスの豊かな「人間主義」の欠如を指摘しているが、その欠如は中国だけに見られることであろうか。著者のいう「未実証の可能性の追跡」というマルクス主義へのバラ色の夢の世界から、現実の中国の状況に価値判断が加えられる反面、フルシチョフが、社会主義社会の「内部矛盾」の存在を否定し、スターリン主義を体制の制度的特質として考察することを拒否していることにふれないのはどういうことであろうか。(3)著者は、毛沢東思想のマルクス、レーニン、スターリン理論からの欠落を指摘しているが、レーニン、スターリン、フルシチョフのマルクスからの欠落をどう考えるのか。欠落部分を指摘することは容易である。問題は、歴史の進展と理論の変容との関連を客観的にどうとらえるかということであろう。現代における「マルクスへの回帰」とか「マルクス主義理論の発展」

とかいうことの意味が、著者にとっては理論的文脈においていまだ深刻には考えられていないようである。しかしこれは「マルクス主義」にとっては実は重大な問題であるはずである。

つぎに若干の分析上の問題についてふれてみたい。(1)1955年の「穏歩前進」からの転換の国内的要因として著者があげている三つの事実のうち、高崗、饒漱石事件は1954年には実質的に処理済みであり、社会主義化のテンポの問題に内在的に影響を与えるような性質の問題ではないのではなからうか。他の二つの胡風集団事件と集団化をめぐる党内の対立も「毛沢東の党内指導権を左右するだけの重大な作用をなしうるものであった」とは考えられない。(2)著者は中共の「スターリンへの復帰」という言葉を使っているがこの概念はきわめてあいまいなようである。巨視的には「解放」以後の中国の政治経済は基本的には、スターリンの段階にあると考えるべきである。(3)著者は、「中間地帯」理論に、中共の統一戦線政策の適用をみていないのはいかなる理由によるものであろうか。(4)現代の「民族民主国家」理論を、著者は、1920年のコミンテルン2回大会のレーニン・テーゼと結合しようとしているが、このテーゼは、中国型の革命政権を想定するのが妥当である。(5)最後に著者は、毛沢東思想の現代における有効性の問題として、かれの「暴動革命観」を提出しているが、民族解放闘争におけるその有効性をわれわれは全面的には否定しえないし、中共自身も無条件的にその有効性を主張しているわけでもない。また、中共の現実の外交政策は一面きわめて弾力的であるのを見のがしてはならないのである。中ソ論争における中共のイデオロギーは確かに硬直しているが、著者も気付いているように、現在の中共には、イデオロギーと行動（または政策）の分裂状況が現われてきているのである。したがってわれわれは、これらの問題をより広い視野からもっと注意ぶかく徹視的にみていく必要があるであろう。

ともあれ、本書は冒頭にものべたようにきわめてユニークな内容をもった若い研究者の野心的労作である。筆者は、中島氏の努力と総合力と豊かな筆力にまず敬意を表したい。筆者は今後、このような研究が現われることこそ、日本の中国研究の硬直性と神秘主義を打破し、社会科学的分析の「共通の場」をつくるものであると信ずる。中島氏の今後の研究活動に期待するしだいである。

(調査研究部東アジア調査室 徳田教之)